

[36] 文學研究表紙奥付等

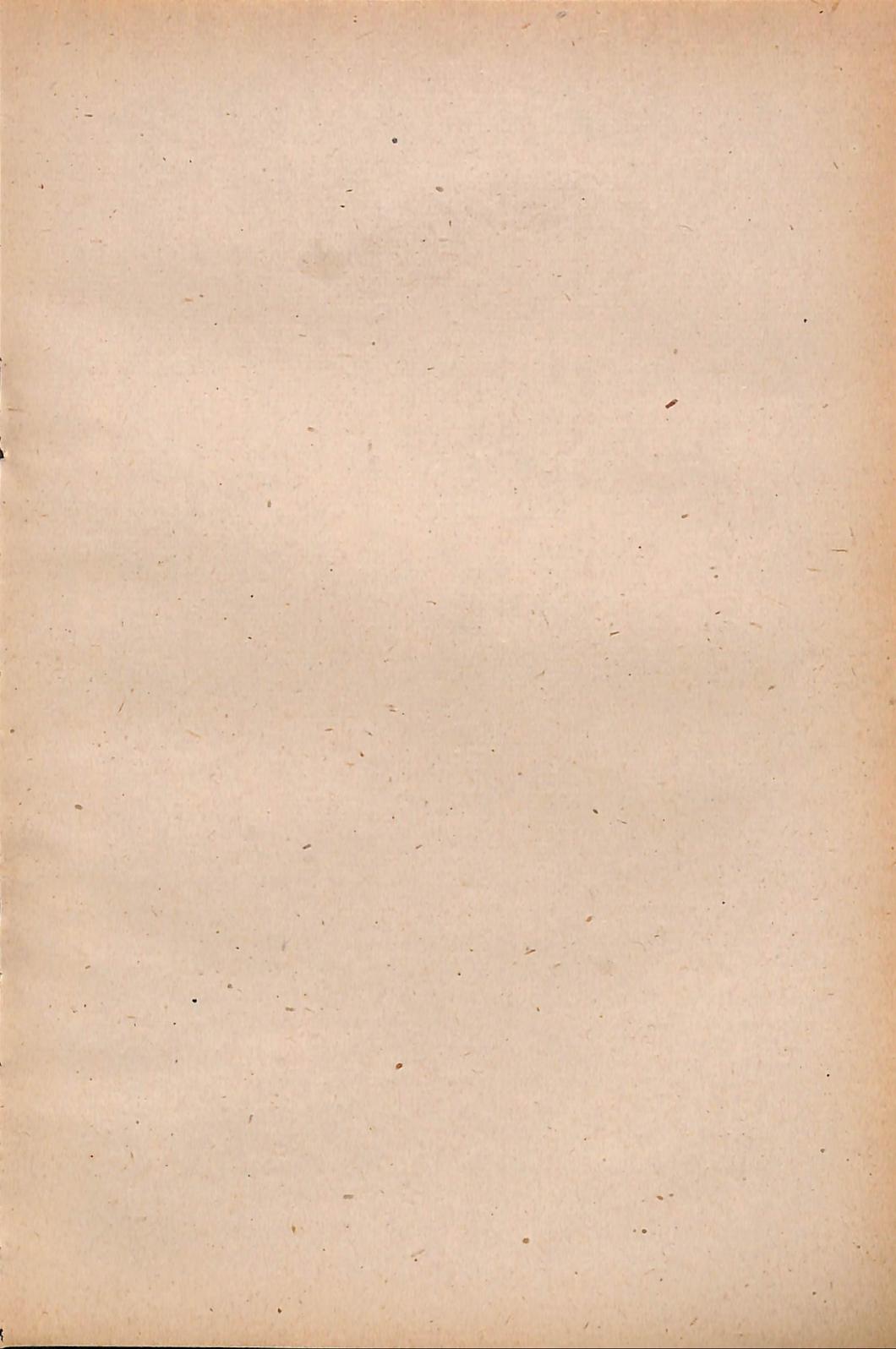
<https://hdl.handle.net/2324/2339115>

出版情報 : 文學研究. 36, 1948-03-30. The Kyushu Literary Society
バージョン :
権利関係 :



故小野島行忍助教授

—— 弔辭・略歷・著作・講義 ——



弔 辭

謹ミテ故小野島行忍君ノ靈ニ告ク

君ハ我カ九州文學會ノ創立ニ際シテ銳意力ヲ致サレ爾來委員トシテ終始ソノ發展ニ盡瘁セラル君ノ效績ハ我等ノ永ク忘ル、能ハサル所ナリ今卒カニ君カ逝去ニ遇ヒ痛惜ノ情ニ堪ヘス茲ニ會同人ニ代リ恭シク哀悼ノ意ヲ表ス

昭和二十年十一月十二日

九州帝國大學法文學部

九州文學會總代 高 木 市 之 助

弔 辭

謹ミテ故九州帝國大學助教授小野島行忍君ノ英靈ニ告ク

君夙ニ優秀ノ資ヲ以テ學ヲ東京帝國大學文學部ニ修メ梵文學ヲ專攻シ學就リテ埼玉縣立能谷中學校ニ教鞭ヲ執リ大正十五年九月迎ヘラレテ本學助教授ニ任セラレ今日ニ至ル迄本學在職實ニ十九年有餘ニ及ヘリ其間君ハ創立日尙淺キ法文學部ノ内容ノ整備ト充實トニ力ヲ致シ學術ノ研鑽ニ學生ノ指導ニ孜ヌトシテ倦ム所ヲ知ラス本學ニ貢獻スル所甚大ナルモノアリ君カ將來ニ期スル所大ナルモノアリシニ噫昊天無情忽焉トシテ幽明境ヲ異ニス豈獨リ君一身ノ恨事タル

ニ止マランヤ本學ノ損失之ヨリ大ナルハナシ嗚呼哀シイ哉然レトモ君カ本學ニ遺シタル生前ノ功績ハ千古ニ不滅ノ光
彩ヲ放チ其ノ訓化ノ及フ所永ク遺韻ヲ傳ヘ遺業ヲ完ウセシムル者蓋シ後世必スヤ其人アラシ英魂聊カ以テ慰ムヘキ乎
本日茲ニ君カ斂葬ノ式典ニ會シ哀愁切々多ク言フ能ハス一言蕪辭ヲ述ヘテ哀悼ノ微忱ヲ表ス

昭和二十年十一月十一日

九州帝國大學總長事務取扱 西

久 光

弔 詞

秋色漸ク深クシテ萬象落莫ノ氣ニ沈ムノ時我九州帝國大學助教小野島行忍氏溘焉トシテ逝カル君ハ明治二十五年十
月生ヲ埼玉縣大里郡熊谷町ニ享ケ環境ノ然ラシムルモノアリトハ云ヘ聰敏ナル君ノ性格ハ早ク志ヲ學問ノ道ニ立テシ
メ遂ニ第五高等學校ヲ經テ東京帝國大學文科大學ニ入學シ初メ英文學ヲ修メシカ後梵文學ニ轉シ大正十一年三月ヲ以
テソノ業ヲ卒ヘラルソノ後郷里ナル熊谷中學ニ招聘ヲ受ケ教育ノ道ニ勞シミシカソノ間ニモ向學ノ熱情已ミ難キモノ
アリソノ專門トスル處ノ梵語梵文學ノ研究ニ没頭セラレソノ成果ハ或ハカーリリダーサノ抒情詩ニ關スル論文トナリ或
ハ數々ノ梵詩ノ翻譯トナリ玲瓏玉ノ如キノ譯文ノ妙ト相俟ツテ梵文學界ニ於ケル君ノ存在ハ早ク世ノ注目ヲ惹ク處
トハナレリカクシテ大正十五年九月ニハ當時創業日尙淺キ我九州帝國大學法文學部ニ迎ヘラレテ助教トナリ印度哲
學史ノ講座ニ屬シテソノ專門トスル處ヲ擔當セラル。爾來星移ツテ已ニ二十年ソノ間如何ニ君カ世俗ニ對スル關心ヲ

離レ與ヘラレタル自ラノ地位ニ感謝ヲ捧ケツ、梵文學ノ蘊奥ヲ究メル道ニ專念シテソノ力ト情熱トヲ盡サレシカハ君ヲ知ル者ノ等シク感嘆措カサリシ處我學部ハ君ヲ有ツ事ヲ以テ誇トシ君カ畢生ノ努力ヲカケラレシ梵詩翻譯ノ業成リ不滅ノ榮冠ヲ贏ル日ヲ期シテ等シク我等ノ樂シミトセリシカモコノ間君ハ更ニ西藏語ノ領域ヲ開カレ學問ノ分野ヲ擴メテ孜々トシテ將來ノ大成ヲ期スル處アリキ君ノ薰陶ニ浴セシ學生歲月ノ長キニ比シ必スシモ多シトハセラレサルモ一度俗塵ヲ離脱シヒマラヤノ高峰ニモ類ヘラルヘキ君ノ高キ風懷ニ接スルト共ニソノ印象ハ深く骨髓ニ徹シ等シク讚仰措カサル處トナルト聞ク君未タ享年五十四歲必スシモ高齡トハ云フヘカラス然ルニ天君ニ更ニ齡ヲ貸ス事ヲ欲セス病魔ノ犯ス處トナリテ茲ニ溘焉トシテ逝ク天ヲ仰キテ泣キ地ニ伏シテ哭スルモノ豈獨リ君カ肉親ノミニ限ランヤ嗚呼君今何處ニ在リヤ我等ノコノ哀惜ヲ知ルヤ否ヤ幸ヒニ知ル事アラハ來テ我等ノ衷情ヲ受ケ以テ孤獨ト旅情トノ慰メトナシ岨シト聞ク旅ノ苦難ヲ速カニ克服ザレン事ヲ

昭和二十年十一月十一日

九州帝國大學法文學部長

竹 岡 勝 也

弔 詞

小野島さん、

日頃病弱な私が、あなたをお見送りするやうなことがあろうとは、夢にも思つたことはありませんでした。非常に優れ

た體質を享けてをられた上に、世俗に超然とし、油山の幽邃境に悠々自適の生活を送つておいでになつたのです。百年の長壽も望み得られたあなたとつたのです。七日の朝干潟さんから御訃報を聞かされました時には、暫らくは我が耳を信じかねたくらゐでありました。承れば、去る八月十四日に御長男が熊谷で空襲のために痛ましくもお果てになり、あなたはその骨を拾ひに遙々と熊谷の御郷里にお歸りになつて、漸く先月の二十八日に福岡にお戻りになつたばかりだつたさうです。それから僅か十日の思ひで、あなたは御愛息のあとを追ひかけるやうに、惶くも逝つておしまひになつたのです。悲惨とも傷心とも全く言語に絶した戦争の結果が、直情徑行の生一本のあなたの御心情にどんな影響を及ぼしたか想像することができません。とりわけて令息の終戦直前の非業の御最後は、どんなにひどくあなたの御心と御身躰とを打ちひしいたことでありませう。搗てゝ加へて困難の多い長途の御旅行が、あなたの御健康に止めを刺したものと思ひます。わが國の不幸な運命の、あなたは貴重な惜しんでも惜しみきれない犠牲者の一人となられたのです。小野島さん、お恥づかしいことですが、私は今もつて死後の靈魂についてはつきりした信念も信仰も持つ事ができません。従つて今あなたの御靈がどこにどうしてをられるのか私には分りません。しかし、少くもあなたの御生前の面影は、いろ／＼の時代のいろ／＼の事件の追憶と結びついて、實に躍如として私たちの脳裡に生きてゐます。眼に見るやうにといふ形容はちつとも誇張ではありません。まづあなたの生地まるだしの全然虚飾といふものゝ無いお顔が眼に浮ぶのと同時に、それとびつたり調和した高らかな自然そのものゝやうなあなたのお聲が爽かに耳にひびきます。殊に御好物のお酒のまはつた時の天空海闊たる笑ひ聲は、ちよつと忘れようとしても忘れる事のできないものです。お酒の席をともした事も度々でありましたが、あなたのお酒は御性格そのまゝで宛として酒仙の趣がありました。私な

どは心ひそかに羨ましく思つてゐたものです。併し私が一番羨ましく思ひ敬服してゐましたのは、御専門の學問に對するあなたのひたむきの情熱でありました。口を開けば梵語の事とその邦譯のお話でありました。梵語についての御蘊蓄とその邦譯の御業績とは、今こゝに喋々する迄もない事ですが、邦譯にあつてのあなたの良心的なそして藝術家らしい御精進は、はたの見る眼も痛ましい程でありました。國語についての御造詣の深さと感受性のこまやかさも驚き入るものがありました。文學研究の二十三輯にお書きになつた譯梵漫語によつても御苦心の一端が窺はれます。歲時集リフシヤウの如きは、大正八年の初稿以來實に三たび稿を改めて漸く定譯が成就したのであります。

月よみは小夜のましろき殿に

若女わかめのやすらかに眼れる顔を

ながく凝眸ひまもりてわりなく焦れ

いま有明恥らへる様に色さむ

この一節によつても、あなたの梵語邦譯がどんな高さのものであるか門外漢の私たちにも分るやうな氣がします。承れば御愛嬢みち子さんがまだ國民學校に入學なさる前から、あなたは梵字の手ほどきをお授けになつてゐたさうです。いかにも小野島さんらしいこの逸話の中にも、あなたのひたむきの梵語への情熱が溢れてゐるのを感じます。道子さんと申せばお子様方の中で私たち同僚に一番おなじみ深いのはこのお嬢さんです。文學研究の會合にはいつもお父様のお伴をして根付けのやうにあなたの傍に坐つておいでました。眼に入れても痛くないといふ可愛さがあなたのお顔に現れてゐました。學校へもよくお伴をしてお父様のお講義中はおとなしく講壇の横に坐つておいでだつたさう

です。これもまたいかにも小野島さんらしい逸話だと思ひます。あのやうに可愛がつてをられたお子様たちや、多年内助につとめ抜かれた奥様を残して、思ひもよらぬにはかの病氣で卒然として永の旅路におつきにならねばならなくなつた時、たとへ佛の家に生れて僧職を持ち續けられたあなたとしても、恩愛の絆の斷ちがたいものがおありになつた事と深く、御推量申します。ましてや御遺族の方々はさきには無残な戦火にお世嗣を奪はれ、今またかりそめの御病氣に家長を失はれ、御悲歎は云ふも愚呆然自失と申すのが眞實のところであらうと思ひます。まことにお痛しい限りに存じます。

小野島さん、今こそあなたは身を以て地上の一切の人間に決して許されることのない神秘のとばりをかゝけて、靈魄の謎を解決してをられるに違ひありません。いづれは私たちも行つく境地であります。地上に生きてゐる限り悲しいかなお教を受ける術はありません。前にも申しましたとほり、あなたは御遺族や私たち友人同僚や門下生の記憶の中に躍如として生き續けてをられます。あなたの業績に至つては今後我國の學界に大きな貢献をすることによつて不朽の生命を持ち續けるに違ひありません。しかし地上に生きる者にとつて地上の別れはやはりとり返しつつかない絶對的の別れです。私たちが敬愛してやまなかつた小野島さんを永遠に今生から失つたことは、惜しんでも惜しみきれず悲しんでも悲しみきれません。

今日の御葬儀にあたつてつたない言葉によつて私たち友人の心持を披歴しますのは、せめてもの私たちの心遣りなであります。

小野島さん、さようなら。

昭和二十年十一月十一日

友人總代 進 藤 誠 一

弔 辭

先生お久しぶりです。長の年月御教導頂きました梅田です。研究室を代表して最後のお別れ申し上げます。

國家未曾有の變換期に、軍籍年齢の吾々師弟の間も長の年月隔絶されて、先生の御近況殆んど知る由もなく打ち過ぎて御無沙汰ばかり致して居りました處、役員間もなく此の急の訃報に全く打ちのめされたやうです。感情がどうしても現實の姿と一緒になりません。恐らく先生を知つて居る人々總てが啞然としておいでになることゝ存じます。昨日干潟先生より御發病より御過ぎになる迄の詳細を承りました。御長男行雄様の熊谷での戰災御逝去の後事を御整理においてになつた旅行の御無理と、打續く精神的な打撃等、全く先生には御無理でした。

靜かな油山の聖域に獨りを樂しみ塵煙を避け、印度古代文豪の筆の跡を唯一の友として一語々々を深く、味ひ續け、梵文譯語の一句を得られる毎に自ら歡喜し、其の喜びを山を下り吾々弟子の一人々々にお分ち頂きましたあの御熱情と學問に對する御良心、恐らく一人々々の研究室員學生の胸に焼きつけられて居ることを確心して居ります。梵文演習の二時間は非常に困難なものでありましたが、又あれ程温い豊かな喜びもありませんでした。あの狭い部屋で先生を中心に取りまいて過しました研究室の雰圍氣は、梵文學其のもの丈でなく寡欲と純情の尊さを身を以て御示し頂き

ました。何一つそんな事についてお口に出た事はありませんが、先生の言行總てが若かりし吾々の胸にあまりにも尊く寫つて居ります。サンスクリットをやられる方々は今日本中に可成りの數になつて參りましたが、純粹梵文學を以て終始御精進下さいました先生を今失ふことは、學界は勿論國家として又ない損失です。國家それ自身はこんな尊い御仕事について決して厚く遇して居りません。然し先生の此の學問への熱情は、世間的な事は問題でなく、御息女ミチ子様はこの御仕事を繼がせ度いと御希望を以て、既に梵文への御指導をお始めになつて居つたとか洩れ聞いて居ります。「所期もなく所得もなく所求もなく……云々」といふさる高僧の悟道の境を身を以てお示し下さいました。數々の尊い學績を残し今先生は靜かにおねむり下さいましたけれど、残りしものは愛情のきづなに引かれ、せめて御次男英雄様修猷館御卒業迄でもと及ばざるうらみをかこちます。八月十四日の埼玉の戦災に長男英雄様を、今亦先生を次々にお送り下さいました奥様始め御遺族の方々の御心中を思ふとき、あまりに人の力の弱きを憾みに思ひます。もう手が届きません。長の年月御手厚い御指導に何等の御恩報しも出来ず申譯御座居ません。唯々衷心より御禮を申上げ御冥福を祈ります。先輩相馬さんや戦死致しました大野君、百濟君等、皆先生をお待ちして居りましょう。靜かに御ねむり下さいませ。

十一月十一日

印度哲學研究室代表

梅田信隆

略 歴

明治二十五年十月二十八日

埼玉縣大里郡熊谷町大字熊谷六五二番地に生る

明治四十四年 九月

第五高等學校大學豫科第一部に入學

大正 四年 七月

第五高等學校卒業

全 年 七月

東京帝國大學文科大學英吉利文學科に入學

大正 五年 四月

梵文學科に轉科

大正 八年 十二月

一年志願兵として輜重兵第十四大隊に入隊

大正 九年 十一月

輜重兵伍長に任ぜられ現役滿期となる

大正 十一年 三月

東京帝國大學文學部梵文學科卒業

大正 十二年 十二月

埼玉縣熊谷中學校教諭に任ぜらる

大正 十五年 九月

九州帝國大學助教に任ぜられ、法文學部勤務を命ぜらる

昭和 十二年 十月

敘勳六等授瑞寶章

昭和 十五年 十月

敘勳五等授瑞寶章

昭和二十年十一月七日

福岡市東油山黒ノ原五一六番地の自宅にて逝去 享年五十四

同 年十二月五日

敘從四位 特旨を以て位一級追陞せらる

著 作

- 一、「カーリグーサの抒情詩」大正十一年三月、大學卒業論文
- 一、梵詩「歳時集」和譯 大正十一年八月、光壽會の爲に執筆
- 一、梵詩「雲の使」和譯 大正十一年十一月（同じく光壽會の爲に執筆）
- 一、ムドガラ、ウパニシヤツト」及「シートーウパニシヤツト」和譯及解題、大正十一年十二月（世界文庫刊行會の爲に）
- 一、「サツカバンハ・スツタンタ」昭和八年二月「文學研究」第三輯所載
- 一、「リツ・サンハローラ」、昭和九年十二月、「文學研究」第十輯所載
- 一、「南傳大藏經第七、長部經典第二中、帝釋行問經」和譯、昭和十年七月
- 一、リツ・サンハローラ（承前）、昭和十年四月、「文學研究」第十一輯所載
- 一、リツ・サンハローラ（完）昭和十年十月、「文學研究」第十三輯所載、尙「リツサンハローラ」は九州帝國大學法文學部哲學史學文學論文集にも所載
- 一、「譯梵漫語」昭和十三年六月、「文學研究」第二十三輯所載
- 一、梵詩メーガ・ツータ散文譯昭和十六年三月、「文學研究」第二十八輯所載
- 一、同（承前）、同年八月「文學研究」第廿九輯所載

- 一、同 (承々前)、昭和十七年六月、「文學研究」第卅一輯所載
- 二、「草枕をよるごと」昭和十八年十二月「文學研究」第卅三輯所載
- 三、「梵語奈留別誌」「文學研究」第卅四輯所載

講 義

昭和二年	第一學期	梵語初歩
同	第二學期	梵語上級
昭和三年	第一學期	巴利文涅槃經
同	第二學期	梵語初歩
昭和四年	第一學期	梵語初歩

同	年	第二學期	梵文學演習
			梵語初步
昭和	五年	第一學期	梵語學
			梵文學演習
同	年	第二學期	梵語學
			梵文學講讀
昭和	六年	第一學期	梵語巴利語對照文法
			梵文學講讀
同	年	第二學期	巴利語講讀
			梵文學講讀
昭和	七年	第一學期	梵語及巴利語
			梵文學講讀
昭和	八年	第二學期	梵文學講讀
			梵語初步
昭和	九年	第一學期	梵文學講讀
			梵語初步

同 年 第二學期 西藏語初歩
梵語上級(梵文聖婆伽梵歌)

昭和十年 第一學期 リツ・サンハローラ講讀
リツ・サンハローラ講讀

梵語初歩
西藏語上級

同 年 第二學期 スム・チユー・パー

リツ・サンハローラ講讀

昭和十一年 第一學期 シュリンガーラ・チラカ

梵語初歩

同 年 第二學期 梵文學講讀

西藏語初歩

昭和十二年 第一學期 梵語初歩

西藏語上級

同 年 第二學期 西藏語講讀

梵語上級

昭和十三年 第一學期

梵語 初步

同 年 第二學期

西藏語 初步
梵語 上級

昭和十四年 第一學期

西藏語 初步
梵文學 講讀

同 年 第二學期

梵語 初步
梵文學 講讀

昭和十五年 第一學期

梵語 上級
西藏語 初步

同 年 第二學期

梵語 初步
巴利語 初步
梵語 上級 (梵文聖婆伽梵歌)

昭和十六年 第一學期

巴利語
梵文學 講讀

同 年 第二學期

梵語 初步
梵語 上級

昭和十七年 第一學期

西藏語初歩
パーリ語初歩

同 年 第二學期

西藏語上級
梵文學講讀

梵語初歩

梵語上級

梵詩講讀

昭和十八年 第一學期

西藏語初歩

梵文學講讀

西藏語上級

梵語初歩

同 年 第二學期

梵語上級

西藏語上級

梵語初歩

昭和十九年 第一學期

梵語初歩

西藏語初歩

同 年 第二學期 梵語 上級

西藏語 上級

昭和 廿年 第一學期 國語ノ梵語

同 年 第二學期 梵語 初步